

## 四姑娘山・写真だより No.3 風に乗って雲まで昇る—パラグライダーの感動

晴れて穏やかな初夏の朝、日射しを浴びた東向きの山の斜面にパラグライダーの翼を広げて遠くを眺めていた。穏やかな日射しの暖かさと、新緑の中を渡って来る風が心地よい。やがて鷹が斜面に連なる尖った峰の上を旋回し始めたのを見つけた。地表の空気が日射しに暖められて風になり上昇し始めたのだ。

暫くすると暖められた上昇風が、パラグライダーの翼を広げた山の斜面にも吹き込んで来た。上昇風は時に強く時に弱くゆっくりと波を打つように吹き込んで来る。眼下の斜面に生える木々の葉や草のなびき方を見ていると、次にどんな上昇風が来ているかが判る。

強い上昇風が来た時を見計らって翼を軽く前へ引く。すると翼は風を一杯にはらんで頭上に高く大きく立ち上がった。そして一歩踏み出すと、ハーネスを介して翼に繋がった私の体は山の斜面を離れ、風に乗って滑るようにゆっくり上昇し始めた。さっきまで見つけていた斜面の木々が眼下に遠ざかって行く。翼を前に進め斜面から離れて行くとバリオメータの上昇音が大きくなっていった。上昇風の中心は斜面から離れた所に有るのだ。

山の斜面に吹き込んでいる上昇風に乗って緩やかに旋回して高度を上げてから、谷間の上空へ進み出て大きな上昇風を探す。本当に大きい上昇風は真っ直ぐ立ち上がるので、山の斜面には入って来ないのだ。

暫くしてバリオメータが強く鳴り始めた。翼が大きな



高度 4500m付近を旋回飛行する筆者。背景は四姑娘山主峰 6250m 南壁。

上昇風を捉えたのだ。翼は 12m 位の幅が有るので左右のどちらが上昇風により強く持ち上げられているかが感覚で判る。強い側に上昇風の中心が有る。その感覚を頼りにして、慎重に旋回しながら上昇風の広さを測り中心の位置を探って行く。上昇風の中心に近づくにつれて風の音もだんだん大きくなって行った。突然、翼が急激に引っ張られるように上昇し始めた。バリオメータの針が振り切れて悲鳴のような音を上げる。上昇風の中心に入ったのだ。

ゴーゴーと言っていた風は上昇風の中心に入ったとたんに静かになり、バリオメータの上昇音だけが鳴り渡っ

ている。上昇風の中心から外れないように翼を大きく傾けて横に振り飛ばされそうになりながら急旋回を続ける。バリオメータの高度計はぐんぐん上がり、眼下に見える山の稜線が小さくなって行った。少し上方に小さな陰が見えた。同じ上昇流に乗って旋回している鷹だった。風に乗って飛ぶ鳥人だけが体感できる感動だ。眼下には里山の新緑が日射しを浴びて美しく広がっていた。

高度を上げて行くとやがて周囲が霞み始めた。暖かい上昇流が露点温度に下がって水蒸気が凝縮して来たのだ。

見上げると白い雲の塊が幾つも蠢いている。バリオメータの上昇音が大きくなったり小さくなったり、あるいは下降音が鳴るようになった。雲底に近づいて上昇風がばらけて来たのだ。勢いが弱くなった雲の塊か

ら出て来た下降流も混じっている。それでも慎重に上昇流を探して翼は上昇を続け、湧き上がって来る雲の塊に取り囲まれて雲の塊に入ったり出たりするようになった。雲の塊に入ると目の前が真っ白になって視界を失い、方向感も失いそうになる。強烈な上昇流や下降流に捕まって肝を冷やす事も有る。しかし感動の時でもある。

何時までもこの雲と遊んでいると、山の反対側に流されて帰れなくなるので、青い空が見える雲の隙間へ翼を進めた。そして次の大きな上昇流を探して、山並みの上を飛んで行った。

大川 健三 四姑娘山自然保護区管理局 特別顧問